

ガラテヤ書3章15-29節 「変わらぬアブラハムへの契約」

1A 有効な約束 15-18

2A 違反を示す律法 19-22

3A 信仰が現れるまでの働き 23-25

4A キリストにある者 26-29

本文

ガラテヤ書 3 章を見てください、私たちは 15 節から見ていきます。前回の学びを思い出してください、ガラテヤ人たちが、ユダヤ主義者らの教えに惑わされて、信仰をもって始まったのに、それを律法の行ないで完成するかのよう動いていました。信仰をもって福音を聞いて、御霊を受けたのに、それからの歩みを規則によって補っていかうしていました。信じるだけでは足りない、行ないを積むことによって救われるのだとする教えでありました。

しかしパウロは、御霊が与えられるという祝福は、信仰によってのみなのだということを、ユダヤ人の父祖アブラハムを引き合いにして説明を始めます。創世記 15 章 6 節にある言葉です。彼は神を信じて、その信仰が義と認められました。そして彼には、祝福の約束が与えられていましたが、12 章 3 節の、「あなたによってすべての国民が救われる。」というものでした。ですから、信仰によってのみ、アブラハムを父とする家族の中に入るのであり、彼の霊的な子孫になることができるのだ、ということです。そして、律法によっては義と認められることはできず、呪いしかもたらされないことも論じます。そして、イエス様ご自身が、木の上、十字架の上でその呪いを受けてくださり、それによってアブラハムへの祝福を、信仰によって受けることができるようになったのだ、と言っています。そして 14 節に、「私たちが信仰によって約束の御霊を受ける」と言っています。

1A 有効な約束 15-18

15 兄弟たち。人間のばあいにたとえてみましょう。人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません。

前回、「兄弟」という言葉は、4 章 12 節まで出てこないと言いましたが、ここ 3 章 15 節にも出て来ていますね。ガラテヤの信者たちが、再び信仰へと戻ってくることを願って、そう呼んでいます。そして、ここでパウロが説明しているのは、日常生活における契約を使って、契約がいかにか有効であるかを説明しています。この「契約」は、ギリシヤ語では「遺言」と訳すことのできるものです。そう考えればなおのこと、それを変更したり、無効にしたり、付け加えることはできないことが分かります。

16 ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言っ

て、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。

人間の契約や遺言において、その条項が無効にされたり、付け足されたりすることがないことを確認した上で、今度はアブラハムへの神の契約の中にある約束を、ここで教えています。アブラハムがイサクをいけにえとして捧げようとした後に、主が約束を確認されました。「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。(創世 22:18)」とされています。子孫が夜空の星のように増える約束もされましたが、この箇所では、単数「子孫に」となっています。

つまり、ここでは大きな意味合いを持っています。アブラハムのひとりの子孫によって、全ての国々が祝福を受けるという約束は、既に神が創世記 3 章 15 節の中で、「女の子孫によって、蛇の子孫の頭を打ち砕く」という約束の中にあることを示しています。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」エバを惑わし、アダムが罪を犯して、神から離れてしまったその人類を、女の子孫によって、その仕業を打ち砕くという罪の贖いの約束ですが、それがアブラハムの子孫にまで受け継がれていることを表しています。

17 私の言おうとすることはこうです。先に神によって結ばれた契約は、その後四百三十年たってできた律法によって取り消されたり、その約束が無効とされたりすることがないということです。

出エジプト記 12 章 40 節において、イスラエルの民がエジプトにいた期間が 430 年であると書いてあります。アブラハムに対する契約は、エジプトに下ろうとしているヤコブに対して継続して与えられました(創世 35:1-12)。ですから、遺言のようにアブラハムへの約束が有効で、それに律法によって取り消されることはないし、無効にされることはないのです。ユダヤ主義者らは、「アブラハムに対する神への約束では足りなかったから、だから神は律法を与えられたのだ。」と主張して、「信じるだけでなく、その他に律法の行ないによって救われるのだ」と教えたのです。しかし、パウロは約束の性質から、そんなことはあり得ないと論じているのです。

ここで、ルターのガラテヤ書の注解書には、良い例えがありました。裕福な人が、一人の子を自分の息子として養子縁組にしました。時が来たら、その子は全ての財産の相続者となります。何年かしてから、老人になったその人は養子にしている息子に、自分の扶養を頼みます。そして、その扶養を行ないます。そうすれば、息子は、自分がお父さんのお世話をしたからその相続を受け継ぐ資格があるのだ、と言えるでしょうか？ 違いますね。これが、「神のアブラハムへの約束は、律法の行ないによって受け継ぐのだ。」と言っている人の間違いなのです。信仰によって義とみなされるのに、後になってきた律法に取って替わるものではないのです。

18 なぜなら、相続がもし律法によるのなら、もはや約束によるのではないからです。ところが、神

は約束を通してアブラハムに相続の恵みを下さったのです。

律法の言っていることは、「これこれをしなければならない。」「これこれを、してはならない。」というものです。けれども、約束というのは、ここにあるように「恵み」であります。「これこれを、してあげるよ。」という神の賜物なのです。ですから、初めに「これこれをしてあげる。」と言われているのに、そこから、「あなたがこれこれをしなさい。そうすれば、義と認めてあげるよ。」と変えてしまうのであれば、神は偽り者ということになってしまいます。けれども、そうではありません。

2A 違反を示す律法 19-22

19 では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。

ここから、「律法」の役目をパウロは論じます。確かにアブラハムによって約束が与えられ、そしてモーセによってイスラエルの民は契約を結びました。もしアブラハムへの約束だけが有効ならば、神が律法を授けた理由は何なのですか？ということになります。シナイ山において主は律法を授けられたのですが、出エジプト記 19 章以降から申命記に至るまでのモーセの律法が、無目的に与えられるということはないはずです。そこでパウロは明確に答えます。それは、「違反」のためです。罪や悪を示し、自分の中身をあぶり出し、そして罪に定めるために与えられています。

私たちのキリストは、罪に定めるためではなく、裁くためではなく、救うために来られました。アブラハムの子孫として、この方によって救いが来ます。この方を信じることによって救われます。ところが、「救いは必要としない」という人々がいます。自分は殺人を犯していない、盗みもしていない、人様に迷惑をかけるようなことはしていないと思っています。自分には何か自分を贖えると思っていて、それで自分で何とかしようとおもって生きています。

主イエスは、このような人々を教師、律法学者やパリサイ派を教師として仰いでいるユダヤ人たちに対して、「わたしは、律法と預言者を成就するために来た。」「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。(マタイ 5:20)」と言われました。そして、彼らが殺してはならないと教えている時に、「兄弟を馬鹿という者は、最高議会に引き渡れます。」と言われ、「姦淫してはならない。」と教えている時に、「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ 5:28)」と言われました。自分はまだ正しさが残っていると思っている者たちは、イエス様の教えられる律法によって、確かに神から切り離された、ゲヘナに投げ込まれるべき者であることを悟るのです。

イスラエルの民が、その契約を与えられた時に、この神への恐れを抱きました。主がモーセに対して、「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。(出エジプト 19:5)」と言われて、イス

ラエルの民は、「私たちは主が仰せられたことを、みな行ないます。」と言って答えました。ところが、主が天からシナイ山に降りてこられて、雷と稲妻、密雲、角笛の音が鳴り響き、主が火の中におられました。そして民に対して十の戒めを与えられました。彼らは、その光景を目撃して、その声を聞いて、たじろきました。そしてモーセに言います。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。(20:19)」自分たちが、直接、主から聞くことはできない。恐ろしすぎて、主に近づけないと言いました。自分たちは、主に言われたことを聞きますと言った矢先に、彼らは聞くことはできない、と言い直したのです。これが律法の働きです。違反を示すものなのです。

そして律法が与えられた経緯ですが、「御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。」とあります。シナイ山の上に主が天から降りてこられた時、その火においては御使いがいたということになります。御使いが神の栄光を携えて、律法を仲介者であるモーセに与え、それから、律法がイスラエル人に伝えられたということになります。ステパノがサンヘドリンのユダヤ人たちに言いました。「使徒 7:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

20 仲介者は一方だけに属するものではありません。しかし約束を賜わる神は唯一者です。

律法は、神から御使いの手に渡りました。そして御使いがモーセに手渡しました。それからモーセがイスラエルの民に語られました。このように仲介者モーセの存在が必要でしたが、約束を賜わる方はお一人です。アブラハムが神から約束を受けたとき、そこには仲介者はいませんでした。神お一人から受けました。なぜパウロが、このような説明を入れているのか、正直あまり分かりません。おそらくは、神の約束が上位にあって、律法は下位にあると教えたいのでしょうか。

21 とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。

神の約束が祝福を与えるものなのに、それに反して律法は罪に定めるのだから、これでは律法は神の約束に反することになるではないですか、という反論があるでしょう。ここは大事な論議ですね。問題は律法そのものにあるわけではありません。パウロはここで、律法を守ることによって命が与えられるなら、確かに義と認められるはずだ、と言っています。ガラテヤ 3 章 12 節には、レビ記 18 章 5 節を引用して、「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」と書いてあります。ローマ 7 章では、パウロはこのように言っています。「7:12-13 ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。」律法

そのものは良いものなのです、そこには神の善、聖さ、正しさが啓示されています。

しかし、問題は私たちに罪があるということです。これは何と言ったらよいでしょうか、人間には完全はないので、例えば病院は人を直すことを目的としながら、医療ミス、医療過誤の事件は後を絶ちません。では、病院は悪いものになるのか？いいえ、違いますね。ここでは人をきちんと直す病院もあるのですが、律法の場合はどの場合においても、誰も救われず、罪に定められてしまうのですが、けれども律法そのものは良い意図で与えられています。問題は罪なのです。

22 しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。

「聖書は」と言っていますが、これもローマ書のほうを見るとはっきり出ています。ローマ 3 章に、旧約聖書からいかに人々が罪の下に閉じ込められているかが書いてあります。「3:10-19 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」「彼らのどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」

そして大事なのは、なぜそのようなことを神がなされたのか？ということです。先ほど、律法によって約束が反故にされたのではない、約束は約束なのだということですが、律法はむしろ、その約束をさらに強固にするためのものなのです。「それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」とあります。イエス・キリストに対する信仰こそが、この約束の実現なのだ、という目的を果たすために律法が一時的に与えられたということでもあります。

3A 信仰が現れるまでの働き 23-25

23 信仰が現われる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。

この「信仰が現われる以前」というのは、キリストの十字架と復活の以前ということです。その時は、二つのことがありました。一つは、「律法の監督の下に置かれ」ていたということです。この監督は、まだ物事をわきまえていない幼子が、しっかりと保護監督の中にいることにより、生きることができるということです。そしてもう一つは、「閉じ込められていました」とあります。これは牢屋のことです。律法によって、自分たちがまるで救いようのない罪人だということを分からせ、それは罪の

支配の中に牢獄の中に入れられたということです。もちろん、律法が来る前から罪はありました。しかし、それが律法によって明らかにされたということです。

興味深いことに、キリスト者の二世以降の方とお会いして救いの証しを聞くと、そうした話が出てきます。主の命令を聞く時に、主に愛されたから、この方に従いたいと思って命令を守るのですが、小さい時は彼らは、「この命令を破ると、地獄に行ってしまうかもしれない。」と恐れがあって、それで守っていった、ということです。心が新たにされないまま、神の言葉を守ろうとすると、そのようになります。その監督の下から、今度は信仰が与えられるようになるのです。

24 こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。

ここの「養育係」とは、保護監督のような意味合いを示す言葉です。例えば、主人の子どもを学校にまで送り迎えするところの奴隷がいました。つまり律法は、私たちをイエス・キリストのところまで導く働きをしている、ということです。

イスラエル人たちは、律法に違反したときに、動物をたずさえて、それを罪のためのいけにえとしました。その頭に手を置き、それから祭司が動物の喉を切り、血を流し、それを祭壇にも振りかけ、肉は祭壇の上で焼かれました。これらのいけにえを見つつ、イスラエルの民が、やがて来られる罪を取り除く方が来られることを、切に願い求めように律法は意図されました。メシヤよ、来てください、と必死になって祈りも求めるように律法は意図してあったのです。したがって、イエス様が来られたとき、「わたしは、律法と預言者を成就するために来ました。」といわれたときに、律法の目的は達成されました。また、「今が恵みの時です。」と宣言されたとき、律法の目的が達成されたのです。そしてメシヤとしてこの方を受け入れ、信じます。このことが義と認められるのです。

25 しかし、信仰が現われた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。

キリストを信じて、受け入れるという信仰が現れました。ですから、ここが大事ですね、「もはや養育係の下にはいません。」ということです。私たちは信仰をもってしても、まだ罪の性質がこの中にあります。肉があります。それで、その負い目を感じるので、再び養育係の下に移りたいと願ってしまうのです。この負い目を自分の行ないによって贖いたいと思ってしまうのです。それで、あらゆる異端が忍び込みます。その負い目を利用して、自分たちのほうに引き寄せようと忍び寄ってくるのです。

4A キリストにある者 26-29

26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。

ここからパウロは、神の子どもになること、神の相続人になることについて話し始めます。ユダヤ人にとって、神の国を相続することは大きなテーマでした。それが救いを示していました。その相続を得るには、当然、神の相続人となる、つまり神の子どもとして生きるのだと教えられていました。けれども、ここに書かれているのは驚くべきことです。これまで、ユダヤ人は神の律法を守り行なうことによって、初めて神の子どもになることができるのだと教えられています。ましてや、律法を持たない異邦人は蚊帳の外です。改宗する必要があります。しかし、「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」とパウロは言っているのです。それで、異邦人も神の子どもになれるし、他に律法の外にいる人々も神の子どもになれます。

27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。

信仰によって義と認められた者たちは、神の子どもになりますが、そこで何をもって生きていくのか？律法との関係でなければ、何なのか？それは、「キリストにつく」という言葉に表れています。アイデンティティーです。自分はどこに属しているのかという正体です。「バプテスマを受ける」とは、その媒体に浸されていっしょになる、ということを表しています。白い布を紫色の染料に入れると、紫色の布に変わるように、です。ここでは、キリストといっしょにされたもの、キリストから切っても切り離せない、結ばれた者ということになります。「ローマ 6:3-4 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」

そして、「キリストをその身に着た」というのも、アイデンティティーのことです。キリストの義を自分の身にまっています。この方を自分のものとして、歩んでいきます。自分が何かを行なっているという生活ではなく、この方を身にまもって生きる生活です。

28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。

かつてラビは、祈りの中で、「私がギリシヤ人でもなく、奴隷でもなく、女でもないことを感謝します。」というものがあつたそうですが、パウロはそれを意識しているのかもしれませんが。「キリストにある者」という中には、人間が設けるところの差別がなくなります。アメリカ人、日本人というような民族の差別がなくなります。みな「クリスチャン」というアイデンティティーを持ちます。男と女という聖別も同じです。奴隷も自由人も、という社会的な立場、経済的な立場もそうです。みなキリストにあつて一つです。

これはまた、違いがなくなるということの意味しません。それぞれの民族に与えられた神の賜物があります。また男と女には、それぞれ神の与えられた役割や機能があります。そして奴隷も、召されたところに留まりなさいとパウロはコリント第一 7 章で教えています。しかし、それらのことが、私たちがキリストにつながっているというところ、その強固なアイデンティティーがあつてこそ、それぞれの賜物を生かし、役割を担うことができます。逆に言うと、そのキリストとの一体性が薄くなると、私たちの間にある違いが隔ての壁として二分してしまうことになるのです。

29 もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

ここも、「キリストのものであれば」となっています。そして異邦人であっても、霊的にはアブラハムの子孫であり、霊的な祝福を受け継ぐところの相続人であるのです。そして 4 章には、相続人についての話題をパウロは続けて話していきます。アブラハムの子孫というところから、これが血縁関係のユダヤ人であり、また律法を行なうところの関係という彼らの考えから、実はそうではない、信仰による約束を受けること、律法の完成であられるキリストを信じること、そこにつながった者であること、そこから相続ができるということを見ていきました。